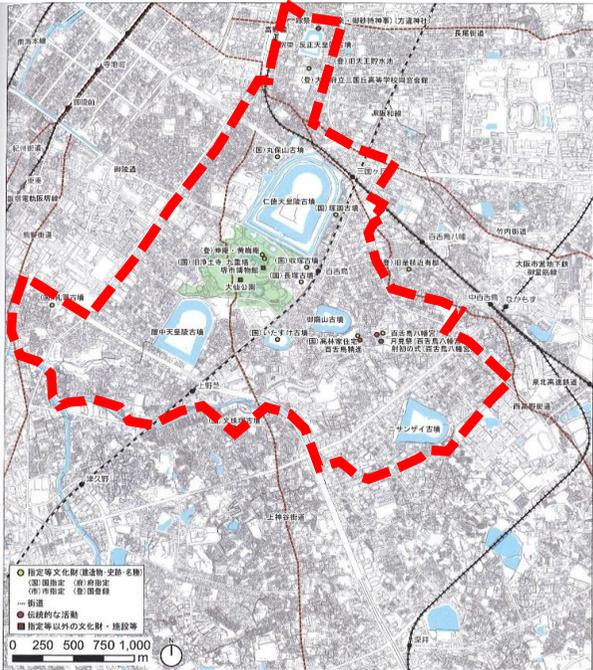


1. 百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

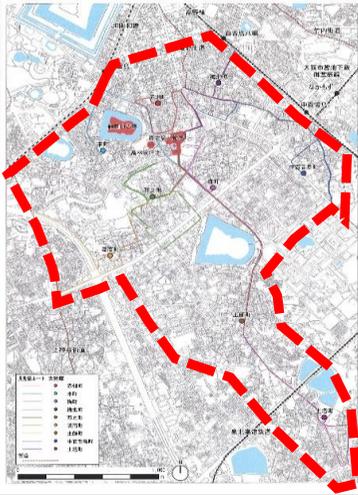
(1) 百舌鳥古墳群の周遊

建 造 物	活 動 内 容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>もず こぶん ぐん</p> <p>○百舌鳥古墳群</p>  <p>百舌鳥古墳群</p> <p>【建築年代】</p> <p>古墳時代（4世紀後半から6世紀前半）</p> <p>【50年根拠資料】</p> <p>発掘調査で出土した埴輪などの遺物</p> <p>【造り・特徴】</p> <p>日本最大の仁徳天皇陵古墳をはじめ形や大きさの異なる44基の古墳がのこされている。</p>	<p>○活動の名前</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>『和泉名所図会』寛政8年(1796)濠の周囲を巡る道から見物する様子を描く。『堺市案内記』昭和3年(1928)や『近畿行脚』昭和3年(1928)で天皇陵の紹介や見学順路について記載している。</p> <p>【現在の活動内容】</p> <p>多くの地域住民が古墳群を訪れ、それぞれの趣きで楽しむ。さらに、地域住民による仁徳天皇陵古墳などでの美化・清掃活動や観光案内などが、古墳を守り伝える大切な活動のひとつとなっている。</p>	<p>百舌鳥古墳群の中心に大仙公園があり、公園内には古墳が点在する。さらに、周辺の住宅地にも古墳が残されており、緑地としての良好な景観をなしている。訪れた多くの人々は古墳を単に山としてみるだけではなく、古墳時代の情景を思い浮かべ、陪塚を従える巨大な古墳を造りえた大王の存在に、畏敬の念を抱くなど特別な思いをはせる。</p>  <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>
<p>たけのうちかいどう にし こごうやかいどう ごりょうどお</p> <p>○竹内街道・西高野街道・御陵通</p>  <p>御陵通</p> <p>【建築年代】</p> <p>街道:古代～中世の道 御陵通:大正13年整備</p> <p>【50年根拠資料】</p> <p>歴史の道調査報告書 標柱石の年代(大正～昭和初期)</p> <p>【造り・特徴】</p> <p>皇陵参拝の標柱石が残されている。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>百舌鳥古墳群の周遊の様子</p>	

2. 月見祭・百舌鳥精進にみる歴史的風致

様式

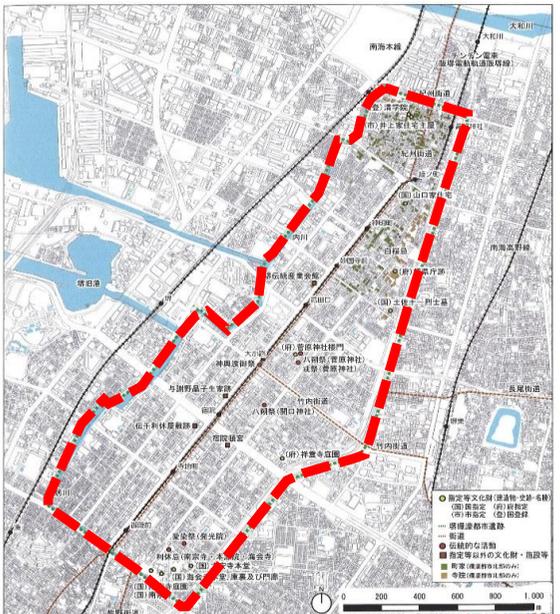
(1) 風致を構成する活動

建 造 物	活 動 内 容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>もず はちまんぐう</p> <p>○百舌鳥八幡宮</p>  <p>百舌鳥八幡宮本殿</p> <p>【建築年代】 享保11年(1726) 本殿</p> <p>【50年根拠資料】 棟札</p> <p>【造り・特徴】 本殿は三間社流造で、屋根は檜皮葺。本殿と拝殿を幣殿でつなぎ権現造とする。</p>	<p>○月見祭・百舌鳥精進</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】 月見祭は『もずの梅町ふるさと話』2005年で、祭の歴史や祭礼について記載し、さらに文政年間(1818～1829)の太鼓を使用していると記述している。 百舌鳥精進は折口信夫『三郷巷談』大正3年(1914)で精進潔斎について詳細に記述している。</p> <p>【現在の活動内容】 月見祭は、旧暦8月15日の中秋の名月に近い土日に開催。宮入日は町内巡行の後に百舌鳥八幡宮へ向かう。翌日は秋季例大祭と布団太鼓の宮出を行う。 百舌鳥精進は、正月に宮司や氏子が精進潔斎を行う。</p>	<p>百舌鳥八幡宮の氏子とする9集落は、百舌鳥古墳群及びその周辺に位置し、住宅地と緑地や水辺の景観をなす古墳が調和した町なみ景観が認められる。 朱色の座布団を5段重ねにしたふとん太鼓を約70人で担ぎ、独特のかけ声と太鼓の音に合わせて街道をはじめとしたルートを通り歩く。百舌鳥八幡宮では各町のふとん太鼓が事前に決められた順番に、町ごとに練り歩く。拝殿前で奉納神事が執り行われる。 百舌鳥精進は、百舌鳥八幡宮の氏子の中で地域をあげて取り組む精進潔斎で、高林家でも行われている。近年は元日だけ精進潔斎をするなど、方法を変えながらも、正月の伝統行事を現在も守り続けている。</p>
<p>たかばやしけ じゅうたく</p> <p>○高林家住宅</p>  <p>高林家住宅</p> <p>【建築年代】 江戸時代前期</p> <p>【50年根拠資料】 建築様式及び文化財保存修理工事に伴う調査</p> <p>【造り・特徴】 江戸時代の大庄屋の建物。木造、平屋建、屋根は茅葺切妻造の「大和棟」。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>月見祭 町内巡行の様子 月見祭 宮入の様子</p>  <p>百舌鳥精進での精進おせち</p>	 <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>

3. 環濠都市の伝統産業にみる歴史的風致

様式

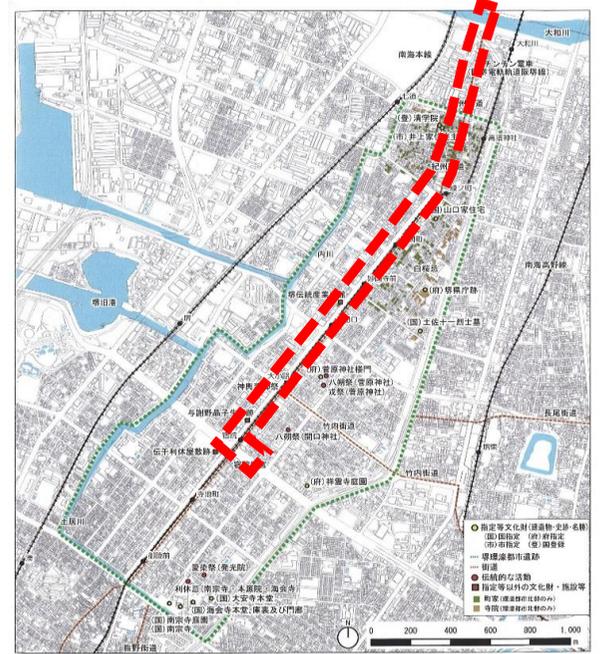
(1) 風致を構成する活動

建造物	活動内容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>いのうえけ せき うえもん じゅうたく てっぽう かじ やしき</p> <p>○井上家関右衛門住宅(鉄砲鍛冶屋敷)</p>  <p>井上家関右衛門住宅</p> <p>【建築年代】 江戸時代前期</p> <p>【50年根拠資料】 建築様式及び文化財保存修理工事に伴う調査</p> <p>【造り・特徴】 江戸時代の鉄砲鍛冶の住居兼作業場。木造、平屋建、切妻造、本瓦葺。</p>	<p>○伝統産業（打刃物・線香）</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>打刃物は近世の書物『堺鑑』貞享元年(1684)・『日本山海名所図会』宝暦4年(1754)・『和泉名所図会』寛政7年(1795)に堺の特産物としての記載がある。線香は、堺奉行所「手鏡」延享4年(1747)の記録・宝暦7年(1757)の記録で線香屋の軒数の記録がある。</p> <p>【現在の活動内容】</p> <p>打刃物は環濠都市を中心に製造業者が分布し、包丁鍛冶、刃付け、柄付けによる分業体制で製造する。線香は、製造元独自の「調香」がなされ、一部では今も手作業による製造がなされている。</p>	<p>環濠都市北部などの、第2次世界大戦の空襲による被災を免れた地域では、今も江戸時代の鉄砲鍛冶屋敷をはじめ寺町や近世後期からの町家が残る歴史的なまちなみが残されている。</p> <p>中世にはじまり近世に発展した打刃物や線香の製造が今も続けられ、さらに、近世や近代の町家で販売する店もみられ、多くの人が訪れている。</p>
<p>けんぞうぶつ</p> <p>○建造物の名前</p> <p>【建築年代】</p> <p>【50年根拠資料】</p> <p>【造り・特徴】</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>堺打刃物の製造風景</p>  <p>近世創業の刃物製造販売店</p>  <p>堺線香</p>  <p>明治創業の線香製造販売店</p>	

4. 神輿渡御祭にみる歴史的風致

様式

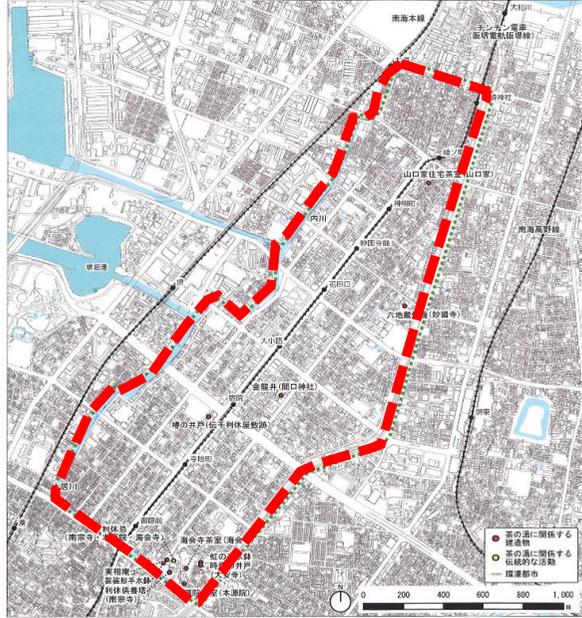
(1) 風致を構成する活動

建 造 物	活 動 内 容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>○宿院頓宮</p>  <p>宿院頓宮</p> <p>【建築年代】 空襲により焼失 昭和24年(1949)再建</p> <p>【50年根拠資料】 堺市史・宿院頓宮HP</p> <p>【造り・特徴】 住吉大社の御旅所。木造、平屋建、瓦葺の社務所に銅板葺の本殿を併設する。</p>	<p>○神輿渡御祭</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>『蔗軒日録』文明16年(1484)に騎馬行列を伴った住吉大明神の神輿が宿院に入る様子が記されている。</p> <p>【現在の活動内容】 住吉大社を出発した神輿が大和川に到着すると、大阪側から堺側への神輿の引き渡しが行われる。そこから紀州街道を南へ進み宿院東宮へ到着する。宿院頓宮では頓宮祭が、飯匙堀では荒和大祓神事が行われた後、住吉大社へと戻る。</p>	<p>元和年間に形成させた町割りを引き継ぐ市街地を舞台に祭礼が行われる。近世の町家が点在する紀州街道で、各町ごとの印が描かれた提灯を掲げた家々の前やチン電の愛称で親しまれる阪堺線の横を神輿が通り宿院頓宮へと到着する。宿院頓宮や飯匙堀での厳かな神事は、堺と住吉大社との古くからのつながりをもつ伝統の重みを伝え、海とともに歩んできた堺の人々の信仰心を感じることができる。</p>
<p>いいがいぼり</p> <p>○飯匙堀</p>  <p>飯匙堀</p> <p>【建築年代】 元禄2年(1689)以前 昭和11年(1936)改修</p> <p>【50年根拠資料】 『元禄堺大絵図』に記載 昭和11年の鳥居設置</p> <p>【造り・特徴】 石垣で取り囲んだ空堀。堀の形が飯匙に似ていることから「飯匙堀」と名付けられたといわれる。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>神輿渡御祭のルートと祭礼の様子</p>	 <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>

5. 環濠都市の茶の湯にみる歴史的風致

様式

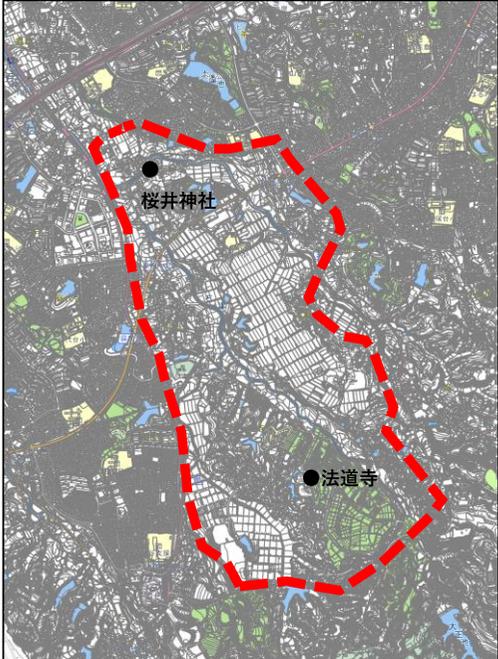
(1) 風致を構成する活動

建造物	活動内容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>かい え じ ほんどう くり およ もんろう</p> <p>○海会寺本堂、庫裏及び門廊</p>  <p>海会寺本堂及び庫裏</p> <p>【建築年代】 江戸時代前期 元文5年(1740)改造</p> <p>【50年根拠資料】 建築様式及び文化財保存修理工事に伴う調査</p> <p>【造り・特徴】 本堂及び庫裏 入母屋造 本瓦葺。 門廊 前面唐破風造 後部切妻造 本瓦葺。</p>	<p>○利休忌</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>『南宗寺史』1927年に明治9年に千利休にゆかりのある塩穴寺から茶室実相庵を移したことを契機に、利休忌が始まったと記す。</p> <p>【現在の活動内容】</p> <p>利休忌は、利休正当忌にあたる2月28日に、南宗寺本堂、本源院茶室、海会寺庫裏内の茶室において三千家による茶会が行われている。さらに南宗寺本堂では法要が行われる。</p>	<p>堺は、中世より千利休をはじめとする茶人を多く輩出するなど、国内の茶の湯に大きな影響を与えた。現在でも、市街地の中に点在する寺社において名水と伝わる井戸や、利休ゆかりとされる手水鉢などが残されている。</p> <p>利休忌はこのような市街地環境のなかで、海会寺本堂や南宗寺実相庵等で行われている。茶会には多くの人が参加し、利休を偲ぶ。</p> <p>近世以降、400年以上の歳月を経てもなお、茶の湯が盛んに行われていることを窺い知ることができる。</p>
<p>なんしゅうじ じっそう あん</p> <p>○南宗寺実相庵</p>  <p>南宗寺 実相庵</p> <p>【建築年代】 明治9年移築 空襲により昭和38年(1963)再建</p> <p>【50年根拠資料】 南宗寺史 新聞報道</p> <p>【造り・特徴】 木造平屋造、棧瓦葺の茶室。内部は二畳台目とする。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>利休忌の様子</p>	

6. 上神谷のこおどりにみる歴史的風致

様式

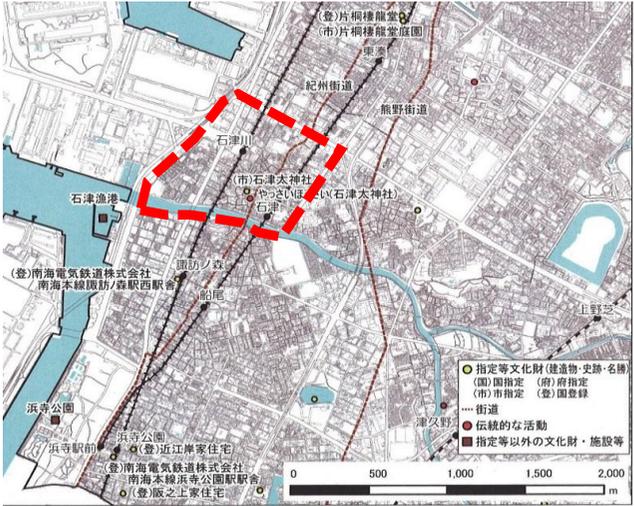
(1) 風致を構成する活動

建 造 物	活 動 内 容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>まぐらい じんじや さいでん ○桜井神社拝殿</p>  <p>桜井神社拝殿</p> <p>【建築年代】 鎌倉時代後期</p> <p>【50年根拠資料】</p> <p>建築様式</p> <p>【造り・特徴】 木造、一重、切妻造、本瓦葺。中央に通路である「馬道」をもつ特徴的な拝殿。</p>	<p>○上神谷のこおどり</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>『郷土舞踊鼓踊』昭和7年(1932)で初めてこおどりを紹介。</p> <p>『国選択 大阪府指定上神谷のこおどり』平成23年(2011)でこおどりの歴史や祭礼の内容などについてまとめられている。</p> <p>【現在の活動内容】</p> <p>桜井神社の秋季例大祭が行われる毎年10月第1日曜日に法道寺近くの国神社と桜井神社で奉納される。鬼神と天狗による中踊りを中心とし、黒紋付に笠を身に着けた外踊りが輪になり、歌に合わせて踊る。</p>	<p>こおどりが伝承されてきた鉢ヶ峰寺地区は、歴史ある寺社や泉北丘陵の緑を残す村落景観や田園風景が一体となった景観が見られる。</p> <p>このような環境のなかで、こおどりは親から子へ、子から孫へと代々受け継がれている。</p> <p>法道寺の寺域に隣接する国神社から桜井神社までの練り歩きは、田園風景の中で行われ、沿道の人々へ「ヒメコ」という神籬をくばる。また、桜井神社の奉納舞は、拝殿の前で厳かに行われる。</p>
<p>ほうどう じ たほうとう じきどう ○法道寺多宝塔・食堂</p>  <p>法道寺 多宝塔(左)と食堂(右)</p> <p>【建築年代】 多宝塔：南北朝中期 食堂：鎌倉後期</p> <p>【50年根拠資料】 多宝塔：瓦名 食堂：建築様式</p> <p>【造り・特徴】 多宝塔：上層の組物などに珍しい意匠を持つ塔。 食堂：府下では2棟だけ残る貴重な建物様式。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>上神谷のこおどり(桜井神社拝殿前)</p>  <p>練り歩き</p>  <p>こおどりの道具等</p>	 <p>桜井神社</p> <p>法道寺</p> <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>

7. やっさいほっさいにみる歴史的風致

様式

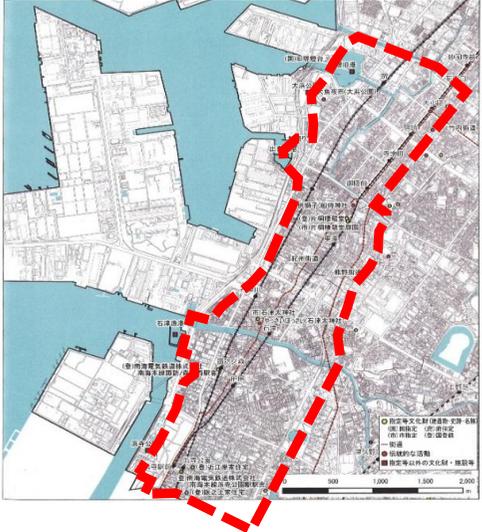
(1) 風致を構成する活動

建造物	活動内容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>いわつ た じんじゅ ほんでん ○石津太神社本殿</p>  <p>石津太神社本殿</p> <p>【建築年代】 江戸時代前期</p> <p>【50年根拠資料】 建築様式</p> <p>【造り・特徴】 北本殿 一間社流造 南本殿 一間社春日造 屋根形式は異なるものの、唐破風などを付し正面からの姿は同じとするなど意匠的な特徴的を持つ。</p>	<p>○やっさいほっさい</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】 『堺大観』明治35～36年(1902～1903)にやっさいほっさいの記述が見える。</p> <p>【現在の活動内容】 毎年12月14日に石津太神社で行う。この地に漂着した蛭子命を村人が助け火を焚いて暖めたという故事に基づき、神木を積み上げた「とんと」に火をつけた後、戎さんが担ぎ上げられ、「やっさいほっさい」のかけ声とともに火渡りを行う。</p> <p>【活動のイメージがわかる写真】</p>	<p>石津太神社は、紀州街道の西側に鎮座している。石津側の南岸には道標が残るなど、街道の景観を残す良好な環境が残されている。</p> <p>この祭礼は、戎信仰と修験道が融合した特殊な祭礼であり、泉州一の奇祭であるともいわれる。半農半漁で生業を営んでいた地域の信仰のありようをあらわした伝統行事として貴重であり、祭礼時には多くの人々にぎわう。</p>  <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>
<p>けんぞうぶつ ○建造物の名前</p> <p>【建築年代】</p> <p>【50年根拠資料】</p> <p>【造り・特徴】</p>	 <p>やっさいほっさいの火渡り</p>	

8. 海浜部の行楽にみる歴史的風致

様式

(1) 風致を構成する活動

建 造 物	活 動 内 容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
<p>はまでらこうえん えき えきしや</p> <p>○浜寺公園駅舎</p>  <p>浜寺公園駅舎</p> <p>【建築年代】 明治40年(1907)</p> <p>【50年根拠資料】 『工学博士辰野金吾伝』大正15年（1926）</p> <p>【造り・特徴】 木造平屋建、鉄板葺の駅舎。浜寺公園・海水浴場などの海浜リゾート地の玄関口にふさわしい駅舎。</p>	<p>○海浜での行楽</p> <p>【50年根拠となる文献+作成年代+記述】</p> <p>『濱寺海水浴場配置図』大正15年(1926)・堺名所(大浜公園)明治36年(1903)・戦前の絵葉書で行楽地として賑わっていたことが確認できる。</p> <p>【現在の活動内容】</p> <p>日本で最初の都市公園のひとつである浜寺公園、明治に公園整備された大浜公園で、多くの人々が一年を通じて行楽を楽しんでいる。</p>	<p>堺の海浜部では、歴史ある公園を中心として、古くからの景勝を今に受け継ぐ、良好な環境を有している。また、明治30年(1897)に開通した南海本線には、浜寺公園駅舎や諏訪ノ森駅西駅舎等、近代の駅舎が今に残されている。さらに、阪堺線は明治44年に開業してから、長年多くの市民に利用され、親しまれてきた。行楽地としてそれぞれの時代で最先端を歩み、様々な形で来訪者を楽しませており、その賑わいが絶えることはない。昔も今も変わることなく、地域の人々をはじめ多くの人々が電車等を利用してこの地を訪れ、親しみを感じながら、それぞれの行楽を楽しんでいる。</p>
<p>すわ もりえきにし えきしや</p> <p>○諏訪ノ森駅西駅舎</p>  <p>諏訪ノ森駅西駅舎</p> <p>【建築年代】 大正8年(1919)</p> <p>【50年根拠資料】 南海電鉄所蔵竣工図面</p> <p>【造り・特徴】 木造平屋建 スレート葺の駅舎。正面上部のステンドグラスには白砂青松の風景が描かれる。</p>	<p>【活動のイメージがわかる写真】</p>  <p>浜寺公園で行楽を楽しむ人々</p>	 <p>歴史的風致のエリアについては調整中</p>